

# サケ科魚類稚魚の内臓真菌症に関する研究—I

## 発病例と病魚の肉眼所見

田代文男・森川進・荒井真

### Studies on the Visceral Mycosis of the Salmonoid Fishes-I

#### Outbreaks and clinical picture and Symptoms

FUMIO TASHIRO, SUSUMU MORIKAWA, MAKOTO ARAI

1974年からサケ科魚類稚魚の腹腔内に真菌が寄生して斃死させる症例が見られるようになった。我国では未報告なので、岐阜県内の発病状況、病魚の肉眼所見を調べた結果を報告する。

最初の発生は1974年12月にニジマス (*Salmo gairdnerii*) 稚魚で観察された。1974年12月～1975年5月迄の発生例は調査件数 107件中8件で、ニジマス5件、アマゴ (*Oncorhynchus rhodurus*) 2件、ヤマメ (*O. masou*) 1件であつ

た。本症発生はいずれも餌付後1～2週令、0.15g～0.3gの稚魚にみられた。発生から終息までは大体20日間位で、水温は7.0～11.0℃の範囲であった。斃死率は10～20%が殆んどだが1例は60%に達した。ウィルスとの混合感染も認められる。

病魚は不活潑となって池底に横になったり横転したまゝ、力なく泳ぎ排水部に集まる。体色は黒化するもの多く、カビ寄生部位(胃部付近)の体表が退色しているものが多い。ほとんど腹部全体または胃部が膨張し、肛門の拡張や、膨張部位の体表に不明瞭な出血斑が認められるこ

---

本報告は魚病研究11(4)に投稿したものの抄録である。

とも多い。生存中から菌糸が体内から体表外に突出している個体もあるが、大部分の個体は斃死後短時間に菌糸が体表に現われてくる。

瀕死魚は腹水の貯留および消化管付近の出血が認められる例が多く、胃壁に充血がみられそれが前腸部におよぶこともあり、胃付近に凝血塊がみられることもある。消化管には粘液しかない。胃、幽門垂、前腸部、脾臓は菌糸に包み

込まれて塊になっており、腹腔壁と臓器が菌糸で縫合されたようになっている。また、菌糸が径約1mmの白い塊状になっていることもある。

内臓の圧偏生標本で菌糸が容易に観察されるが、腸内容物からはまれにしか観察されないのが特徴である。

感染経路・治療方法は不明である。

田代 謙一、新山 英、森下 九郎

Studies on the Visceral Mycosis of the

Salmonoid Fishes-I

Outbreaks and clinical picture and symptoms

FUMIO TASHIRO, SHOSUJI MORIKAWA, MAKOTO ARAI

本報告書は、1974年12月15日、0.15%の硝酸銀溶液で消毒された、産卵後2週間経過した大体20日間位、水温は19-21°Cの飼育水槽に、10-20%の酸素を供給した、100匹に達した、ウエスタンシロギソウの産卵魚を飼育している。

産卵後2週間経過した産卵魚は、前腸部、胃壁、脾臓、幽門垂、前腸部、脾臓に充血がみられ、それが前腸部におよぶこともあり、胃付近に凝血塊がみられることもある。消化管には粘液しかない。胃、幽門垂、前腸部、脾臓は菌糸に包み

1974年12月15日、産卵魚の産卵魚に、0.15%の硝酸銀溶液で消毒された、産卵後2週間経過した大体20日間位、水温は19-21°Cの飼育水槽に、10-20%の酸素を供給した、100匹に達した、ウエスタンシロギソウの産卵魚を飼育している。

産卵後2週間経過した産卵魚は、前腸部、胃壁、脾臓、幽門垂、前腸部、脾臓に充血がみられ、それが前腸部におよぶこともあり、胃付近に凝血塊がみられることもある。消化管には粘液しかない。胃、幽門垂、前腸部、脾臓は菌糸に包み